

頼 山陽 の足跡と事蹟

1780	安永9	1	12月27日、大阪に父春水、母静子の長男として生まれる。 幼名「久太郎」
<p>※春水=延享3年6月30日(1746.8.16)-文化13年2月17日(1816.3.17) 安芸竹原の紺屋を営む富商の子として生まれる。春水の父(惟清)は教育熱心であったので、4-5歳の頃から京坂の学者のもとで学問にいそしむ。春水は、子供の時から神童といわれるくらい学問ができた。28歳の時、大坂江戸掘北に私塾青山社を開く。弟の杏坪、春風も儒者となり、三頼と称された。母は当時の武家の女子の水準をはるかに超える文芸(特に歌人として)の才人であった。</p> <p>※母静子=春水とは静子の結婚は、春水35歳、静子21歳のときであった。静子は、町医者の子であったが、父は儒学にも通じていた。静子は、梅颯(ばいし)という号を持ち、文芸は当時の武家の女子の水準をはるかに抜いている学問があった。多くの歌を詠んでいる。</p>			
1781	天明元	2	父の春水が広島藩の儒者として召抱えられる。
<p>※禄30人扶持(30石相当)、御小姓支配。晩年は300石に取りたてられた。</p> <p>※藩儒となった春水は、建議して藩学を朱子学に統一した。後に幕閣の主座についた松平定信が、異学の禁制を行い、朱子学に統一したが、この広島藩がその先鞭をつけた。そのために、春水は、松平定信からも親信されていた。</p>			
1783		3 4	8月、父が江戸詰を命ぜられ、母と共に母の実家に預けられる。
1785		5 6	5月、父母に連れられ広島の実家に帰る。
1786		6 7	正月、叔父の杏坪について『大学』の素読を始める。
1787		7 8	藩儒、金子楽山、高橋公熙について学ぶ。
1788		8 9	正月、藩の学問所に入る。
1789	寛政元	10	3月『論語』を読了。
1790		2 11	正月『元和訓令』を謄写する。 10月から翌年4月までに『易経』を読む 藩侯に初見する。
<p>※元和訓令・・・武家諸法度？</p> <p>※易経・・・五経(儒教の五つの経典・易経、書経、詩経、礼記、春秋)の一つ。占いの書。天文・地理・人事・物象を陰陽変化の原理に基づいて説明したもので、なかなか難解である。幼くしてこれを読んだ山陽は学がかなり進んでいたことがわかる。</p>			
1491		3 12	父が「襄」の名を贈る。 この年、「立志論」を作る。
1793		5 14	正月元旦、「十有三春秋・・・」の五古を作る。 6月4日、赤崎彦礼より柴野栗山の教訓を伝えられ、『通鑑綱目』を読み始める。
<p>※ 五古・・・五言古詩</p> <p>※ 柴野栗山の教訓・・・「春水は、たいそう立派なお子を持たれた。しかし、このまま詩人になさるおつもりか。それよりも、実才を身につけるよう指導なさるのがよい。そのためには、歴史を勉強させることである。歴史は『通鑑綱目』から取りかかるのがよかろう」</p> <p>※『通鑑綱目』・・・宋の哲宗の時代、これを輔けて名宰相とうたわれた司馬光が周・後周の1,360年間の事蹟を編んだ『資治通鑑』を南宋の大学者・朱子が論評も加えて整理した名著。全59巻。</p>			
1795		7 16	地理学者古川古松軒が来訪し、日本地図を土産にもらう。 また、父のもとを訪れた著名氏と会う。
<p>※この地図は、国や郡の境を書かず、山脈や平野が詳しく書かれた、いわゆる地勢図であった。この地図により、山陽が歴史の編著をする際に大いに役立った。</p>			
1796		8 17	正月、元服の式を行う。 この年、「古今総議」をつくる。

※「古今総議」・・・後年の『日本外史』の序文とほとんど変わらない論文。			
1797	9	18	3月12日、江戸詰になった叔父の杏坪に伴われ、江戸遊学の途に入る。 4月11日江戸に着き、昌平學に入る。
<p>※昌平學・・・これまで「弘文院」と言われた表向き林家の学問所であったが、山陽が入学したこの年に幕府の直轄となり、「昌平坂学問所」(通称昌平學)と改称された。</p> <p>※この旅が山陽にとって初めての大旅行であった。旅の途次、一の谷の古戦場を望んで、「一谷懐古」という古詩を歌う。</p> <p>※江戸では、昌平學の構内にある尾藤二洲のもとに身を寄せ、二洲から歴史談義、人物論などを個人的に学び、これが後に歴史編纂に大いに役立つ。</p>			
1798	10	19	4月、杏坪の下番に伴われ、江戸を去る。 帰路、大阪で生涯無二の友となる篠崎小竹に会う。 5月13日、広島に帰着。
<p>※在府1年は短い、これは山陽の学が学ぶことより勝っていたためや江戸の文化一般が魅力を感じるものではなかったなどと思われる。</p> <p>※在府中に作った詩文。 「紫海行」元寇を歌いあげもので、後年の『日本楽府』に「蒙古来」という題に改め収載している。</p> <p>※「楠公論贊」楠正成の誠忠を論じた名文。</p> <p>※帰路は、新しい風景に接するため、路を北にとり、大宮、上州の松枝、妙技山を眺望しながら碓氷峠を越える木曾街道を通る。そして、初めて京都に入り、ゆっくり滞在して、大阪・神戸経由で。また、旅の途中諸名士を訪ね、詩を応答する。</p> <p>※篠崎小竹=1781.5.7-1851.6.7 儒者・書家。山陽の才文を見抜き、山陽の死後、遺児の面倒まで見るほどの友人であった。</p>			
1799	11	20	2月、御園淳子(15歳)を妻に迎える。
<p>※20歳にして妻を迎えた理由・・・妻を迎えたのは山陽の意思ではない。父は、山陽が天下の自由人として羽ばたきたいという大望を持っていることを知っていた。脱藩の意思があることも知っていた。そこで、妻を迎えて、落ち着かせたいと願っていたためであろう。</p>			
1800	12	21	9月9日、竹原の大叔父の弔問に出発し、途中京阪に向かっ脱奔する。 11月3日、広島へ連れ戻され幽室される。
<p>※なぜ脱奔したか・・・少年時代から諸書や諸先達に学んできた山陽は、青年期になって生涯の具体的な目標ができてきた。それは、自己の意見を取り入れた日本の歴史を編んで、広く世間の人々に啓蒙しようとするのであった。</p> <p>しかし、山陽は、藩儒の嫡男であり、藩の統制のもとに置かれていた。厳しい身分社会の中で、自らの信念とする歴史書を編むことは不可能である。</p> <p>そのため、危険を冒してまでも脱奔をしたのである。</p> <p>当時、脱藩は重罪であり、見つかれば次第切り捨てられて、家は断絶されても仕方のないことであった。</p> <p>山陽の脱奔に驚愕した頼家では、山陽を狂人として取り扱うことにより、ことなきを得ようとした。ただ、父春水は、それほど驚かず、山陽が京都にいと見込みを付けて、知人に搜索を依頼した。</p> <p>山陽の脱奔が、婦女、金銭の類であればまだしも、大志を抱いてのことなので、これを機会に廃嫡にして、藩当局に働きかけ、結局は山陽が望む方向になってしまった。</p> <p>事なかれに終わったのは、藩主が春水や山陽を認めていたからだともいう。</p> <p>ただし幽閉は免れなかった。</p>			
1801	享和元	22	2月16日、妻淳子を離縁する。 2月20日、淳子に長男余市が生まれる。

			<p>※このまぬ結婚を強いられた山陽は、幽室中ということもあってか、僅か1年で離縁している。しかし、淳子は孕んでおり、しかも、離縁された数日後に生んでいる。子は、山陽の家に引き取られ、山陽が廃嫡となったため、祖父から孫へ父春水に次いで家主となった。実際は、山陽に代わり、山陽の従兄弟が立てられたが、早世のためこのようになった。</p>
1802	2	23	<p>この年、『史記』を読み、修史に集中する。 この年から、『日本外史』を書き始める。</p>
			<p>※ 幽室となると一般には腐るものだが、さすが天下の才在。山陽は天与の閑暇と考へ、広く諸書に接した。この幽閉の間に、生涯の事業となる、国史を書くという確固たる大望を持つ。国史を書くということは、父春水の意志でもあったという。さらには、欧米列強が日本近海に現れ始め、日本の国防の観点からも、国史の重要性の機運が起きていた。</p>
1803	3	24	<p>8月、廃嫡を許される。 12月、幽室を解かれる。が、門外自由は許されず。</p>
1804	文化元	25	<p>正月、山陽廃嫡のため、従弟の景讓が養子となって入家する。</p>
1805	2	26	<p>この年、門外自由を許され、藩学助教に挙げられる。 『日本外史』の草稿を示す</p>
			<p>※ 外史の根本精神として朱子学の哲学においた。それは、王道を以ってあるべき本来の姿とし、王道を尊び、霸道を卑しむという考えである。</p> <p>※ 草稿は、始め、神武記から始めようとしたが、あまりにも膨大すぎ、生涯をかけても達成されない恐れがあるため、源平から徳川までの時代とした。それでも、全二十巻に及ぶ。</p>
1806	3	27	<p>『日本外史』豊臣氏まで脱稿する。</p>
1809	6	30	<p>神辺の管茶山塾に移る。</p>
			<p>※神辺=現在の広島県福山市神辺町。</p> <p>※管茶山=1748.2.29-1827.10.3 儒学者・漢詩人。私塾黄葉夕陽村舎を開く。その後塾は福山藩の郷学として認可され廉塾と改められた。山陽道を往来する文人の多くが塾を訪れたという。春水の古くからの友人で、春水が山陽を託すことにした。</p>
1811	8	32	<p>閏二月、神辺を去って、京阪に向かう。 5月、入京し、新町通丸太町に開塾する。</p>
1812	9	33	<p>この年、『日本外史』の論贊を起稿する。</p>
1813	10	34	<p>3月、父及び長男余一を迎え、京阪を廻る。</p>
1814	11	35	<p>正月、梨影(小石氏)を後妻に迎える。 8月、広島に帰省する。</p>
1815	12	36	<p>1月28日、義弟の景讓病没。享年26歳。 4月、父の病を聞き帰省する。</p>
			<p>養子の景讓の死により、先妻の子余市が春水の相続者と決められる。</p>
1816	13	37	<p>2月、父が危篤となり帰省。父病没。享年71歳。 父の喪に服する。</p>
			<p>喪は3年間続けた。喪の内容として、好きな酒をひかえ、肉も食わず、妻もしりぞけ、父の祭祀と母の慰問に勤めた。母の慰問とは、書状、菓子などをたびたび送っている。</p>
1818	文政元	39	<p>2月、父の法要を営むために帰省。 3月、九州遊歴の旅に出る。</p>

			<p>※九州遊歴=福岡-長崎(2か月滞在)-茂木-天草-大矢野-熊本-水俣(徳富蘇峰の先祖の家に泊)-阿久根-鹿児島(20日あまり滞在)-加治木-熊本-阿蘇-竹田(田能村竹田を訪ねる・6日間滞在)-日田(広瀬淡窓を訪ねる)-筑後川を下り久留米-再び日田-耶馬溪-広島</p> <p>※天草には上陸していないというのが通説だったが、今では上陸したのが定説となっている。また、この時詩ったのが、有名な「泊天草洋」である。</p> <p>※耶馬溪を訪れた山陽は、感激してここを耶馬溪と名付けた。</p>
1919	2	40	<p>2月、九州遊歴を終え、広島に帰る。 3月、母を連れ、京都に戻る。 閏4月、母を送って広島へ帰る。</p>
			<p>※京では母をあちこち案内している。丸山の彼岸桜、壬生の狂言、島原、書画の展覧会、祇園の二軒茶屋、嵐山、北野天満宮、平野の夜桜、吉野山、法隆寺、和泉、大阪天王寺、道頓堀で芝居見物、琵琶湖、宇治など。</p>
1820	3	41	<p>この年、「耶馬溪巻」が学者・文化人の間で評判になる。</p>
1821	4	42	<p>4月、両替町押小路へ移転し、薔薇園と名付ける。</p>
1822	5	43	<p>11月、東三本木丸太町に移転(自家)し、水西荘と名付ける。</p>
1823	6	44	<p>11月7日、嫡子又二郎(士峰)生まれる。</p>
1824	7	45	<p>3月、母を迎えて各地で遊び、10月、母を送って広島へ。 9月、大塩平八郎と初めて会う。 11月、広島を発ち、12月、京都へ帰る。</p>
			<p>※大塩平八郎=寛政5年1月22日(1793.3.4)-天保8年3月27日(1837.5.1)。号中齋。大坂町奉行所与力で儒者(陽明学派)。大坂の与力として、腐敗の極に達していた市政を刷新し、暴利をむさぶる悪徳商人をこらしめた清廉潔白な士。山陽は、学問を実用とすることをモットーとしていたから、平八郎とは意気投合し、最友として交友した。もし、平八郎が乱を起こした時まで、山陽が生きていたら、乱という暴発は防いだのではないかと云われる。</p>
1825	8	46	<p>5月26日、二男、三樹三郎(鴨崖)生まれる。 9月26日、叔父の春風、病没。享年73歳。 10月に広島へ帰省する。</p>
1826	9	47	<p>12月、『日本外史』ようやく完成する。</p>
			<p>※『日本外史』は、28歳の文化4年(1807)ひとまず脱稿するが、その後も集成を加え、論贊と言って史論の部分を書き加え、この年の12月ようやく完成した。旅の時にも原稿を持ち歩き、寸暇を惜しんで書き直したり、書き足したりしたという。すなわち、20年近くを外史のために費やしている。</p>
1827	10	48	<p>3月、母及び叔父の杏坪を迎え、5月まで接遊する。 5月、松平定信に『日本外史』を進呈する。 8月、管茶山の危篤を聞いて西下する。</p>
			<p>※『日本外史』は、基本的に、全体を貫く精神は、天皇を中心とした国体を是とし、武家政治を否としている。したがって、発禁となるを最も恐れた。時の権力の中枢にいた松平定信に認めってもらうことに苦心し、さまざまな工作をしている。また、定信も一代の賢人であり、見識、人格も人より上にあつたので、山陽から外史が届けられると、全二十二巻の大冊を約25日で読み終わり、いたく感激したという。</p> <p>山陽は、定信から献上のお礼として、『集古十種』と白銀二十枚を貰っている。</p> <p>※松平定信=宝暦8年(1758)12月27日-文政12年(1829)5月13日。幼少から聡明で知られており、その地筋からいずれば第10代將軍家治の後継と目されていたが、時の田沼にうとまれて、白河藩主となった。ここから幻の第11代將軍といわれる。田沼意次失脚後、老中主座となる。</p>
1828	11	49	<p>正月、水西荘の別邸を設け山紫水明処と名付ける。 12月、『日本楽府』を作る。</p>

※水西荘は明治に取り壊されたが、山紫水明処は現存している。

※『日本楽府』=山陽はね詩人としても天賦の才があった。国史に題材を求め、国の数66にちなんで66曲を作った。この66曲の中で、傑作といわれるのは、「炊煙起ル」「四天王」「烏帽子」「練糸」「蒙古来」「土窟」「本能寺」など。

1829	12	50	2月、父の十三回忌のため広島へ帰る。 3月、母を伴い、京都へ戻る。 10月、母を尾道まで送り、11月、京都へ帰る。
1830	天保元	51	6月、母の病を聞き、広島へ下る。 9月、大塩平八郎の勇退に際し、送序を贈る。 この年『通議』を脱稿する。
1831	2	52	10月、広島へ下る。
※これが最後の広島行きとなった。これまで広島へ下ること、11回に及んだ。			
1832	3	53	4月、大塩平八郎を訪ね、『古本大学刮目』に序文を約す。 6月12日、咯血する。 7月25日、大咯血。 9月23日、『日本政記』の論文を校し、没する。
※『日本政記』=『日本外史』が武門政治の歴史書であり、武家がいかに覇権を獲得したかに力点を置いているのに対し、『日本政記』は神武天皇から、後陽成天皇まで、百八代の歴史を一望のもとに展覧し、歴代の政治の得失、後世の模範となる点、戒めとする条理などを書いている。ただし、その終わりを、徳川体制を直接批判することに躊躇し、豊臣氏までで終わっている。 ※後陽成天皇=在位、天正十四年十一月7日(1586.12.27)-慶長十六年三月27日(1611.5.9) ※山陽の墓は遺言により東山の長楽寺(時宗)にある。戒名はない。			
1837	8		大塩平八郎、門人・民衆と共に蜂起する。(大塩平八郎の乱)
	7・8		この年頃、『日本外史』が版本となる。
1844	弘化4		川越藩が『校刻・日本外史』(川越藩)初版全十一冊が発刊される。
※川越藩=徳川秀康の庶流で、松平斎典が藩主。松平定信の桑名藩(もともと定信は白河藩主であったが、定信失脚後桑名藩へ転封している)とは親戚にあたり、山陽が定信に進献した外史を借り出し、校訂したのを藩校の教材として出版した。これが、多くの学人の評判となり、川越藩では、増刷に増刷を重ねた。明治32年までに14版を重ね、多い年には一万部以上を出版した。当時の知識人、すなわち漢文が読める人が、せいぜい2,30万人であったので、彼らのほとんどが日本外史を手に入れたことになる。空前のベストセラーであった。山陽が生きていたら、どれほど感激したことだろう。			